

教育イノベーション・トライアル支援制度

令和8年度実施プログラム 取組概要

※所属・職名は、令和8年4月1日時点の内容を記載しています。

1 ファブスペースを活用した食文化ハッキング・プロジェクト	
申請代表者	大島 拓郎（教学センター情報理工学部事務室／嘱託職員）
共同申請者	高見 知里（教学センター情報理工学部事務室／特定専門員）
取組概要	<p>本活動は、学年や専門を問わず学部生・大学院生が参加できるファブスペースを活用した創作の入口を拡張することを目的とする。主体的な制作動機を持たない学生でも当事者意識を持って関わりやすい「食」を共通テーマに、デジタル技術を用いた園芸体験や AI を用いた新しい料理の開発を実践する。これにより学部生と大学院生の交流機会を創出し、試行錯誤を通じた課題発見力やデジタル技術の活用力の育成と大学院進学への関心を高める。活動を通して、ファブスペースを多様なアイデアや実験、交流が生まれる拠点として再活性化し、本学の教育改革への波及を目指す。具体的には、IoT 園芸と AI を用いた創作料理の考案、対外発表としてものづくりイベントへ出展する。</p>
2 会計分野における課題解決志向型データ分析教育	
申請代表者	近藤 隆史（経営学部／教授）
共同申請者	石光 裕（経営学部／教授） 西居 豪（学外：専修大学商学部／教授） 早川 翔（経営学部／准教授）
取組概要	<p>本活動は、企業ケースや有価証券を含む財務データを基盤とした教育コンテンツの開発・実施を通じて、会計学を専攻する学生に実践的な分析技術と創造的思考力を育成することを目的とする。近年、企業実務では、会計データを単なる集計や事後的報告にとどめず、企業組織や意思決定の文脈の中で解釈し、判断や予測につなげる分析的思考が求められている。一方、従来の講義や定型的なケース演習では、データの収集・前処理から分析、解釈、考察へと至る一連のプロセスを体系的に学ぶ機会とは十分とは言えなかった。本活動では、クラウドサービスやデジタルツールを活用し、学生が自ら課題や仮説を設定し、それに応じた分析を行い、結果を会計的な判断や考察へと発展させる学習を可能とする教育コンテンツを開発する。さらに、こうした実践的学びの効果を認知欲求や創造性の観点から測定・検討し、教育内容の改善と本学部の教育理念に沿った高度な学修の実現を目指す。</p>
3 シリアスゲームの製作を通じたコンストラクショニズム教育の実践	
申請代表者	森口 文博（経営学部／准教授）
共同申請者	なし
取組概要	<p>本活動では、演習で取り組む課題を「カードゲーム化」することを通じて、学生の深い学びと行動変容を促す「コンストラクショニズム教育」に基づいた教育実践を行う。学生は演習主旨に沿った社会課題をテーマに選び、カードゲームのルールを構築する過程で、能動的なリサーチや当事者へのヒアリング、問題の要素分解を通じて論理的に成果物を創出し、実装するプロセスに挑戦する。</p> <p>具体的には、シリアスゲームの専門家、企業等の協力を得て、通年の活動を通じてカードゲームを試作する。さらに、学内での体験会や外部展示会等への出展・発表といったアウトプットの場を設けることで、実践的な学びの機会を創出する。</p> <p>単なる調べ学習に留まらず、PBL 活動による成果物を社会に発信するプロセスを通じて、学生の問題解決能力やアントレプレナーシップを育成することを目的とする。</p>

4 Duolingo for school を活用した外国語学習	
申請代表者	下田 幸男 (外国語学部/教授)
共同申請者	平塚 徹 (外国語学部/教授) 澤田 達也 (外国語学部/准教授) 今村 圭 (外国語学部/准教授)
取組概要	Duolingo for Schools(無料)を活用し、英・伊・独・西・仏・露・中・韓・インドネシア語、日本語母語話者でない人には日本語を対象に、授業外での毎日の継続学習(目安 10 分)を中核とした学修支援を行う。学習は年間を通じて実施し、毎日学習することを推奨する。教員はクラスを作成し学生を登録、ダッシュボードにより XP(学習量を数値化したポイント)・学習日数(累計・連続記録)を定期的に確認する。学期ごとに学習ログを集計し、言語別の学習量、継続率、脱落時期を分析することで、外国語における学修継続の成立条件を検証する。年度末には、運用指針、分析結果をまとめ、継続学習型モデルとしての有効性を明らかにする。年間を通じて成績優秀者(XP の高い学生)には学習奨励金を贈呈。

5 「韓国の歴史・社会・文化」に関する総合型韓国語教材の開発	
申請代表者	朴 真完 (外国語学部/教授)
共同申請者	蔡 濟英 (全学共通教育センター/非常勤講師) 高 永珍 (全学共通教育センター/非常勤講師)
取組概要	外国語学部生の多様な学習ニーズ(留学・検定・実務)に対応するため、市販教材では扱いが薄くなりがちな「韓国の歴史・社会・文化」の体系的理解を軸にした総合型教材『韓国語で読む韓国社会と文化』(仮題)を開発し、授業で試行する。本プログラムは、学習者ニーズ調査から着手し、その結果と既存教材の分析を踏まえて、歴史・社会・文化の3分野、それぞれについて1ユニットを試験的に作成する。各ユニットは実際の授業で運用し、事前・事後アンケートおよび小テストにより学習効果を測定する。得られた成果は国内の関連学会で共同発表を予定している。代表者(教材設計・統括)と共同申請者2名(教育測定・データ分析)は、外国語学部と全学共通教育センターの学部横断的な連携体制のもとで各ユニットの作成と実施を分担し、教材開発手順のテンプレート化と他科目への展開を目指す。

6 ヘルシーキャンパス推進のための健康教育に関する学内調査	
申請代表者	山野 洋一 (教育支援研究開発センター事務室/公認心理師/嘱託職員)
共同申請者	東 あかね (保健管理センター/医師/センター長) 森 佐知子 (保健管理センター/看護師/専任専門員) 杉江 芳隆 (教育支援研究開発センター事務室/専任事務職員) 鷲尾 渉 (教育支援研究開発センター事務室/専任事務職員) 磯貝 瑛里 (教育支援研究開発センター事務室/特定専門員) 山内 尚子 (教育支援研究開発センター事務室/事務長) 三田 貴 (教育支援研究開発センター/副センター長)
協力者	梶浦 真琴 (文化学部/4年生/学生)
取組概要	本取組はヘルシーキャンパス推進のため、大学生の健康教育に必要な基礎資料を得ることを目的として学内調査を実施する。 近年、日本の喫煙率は低下している一方で、加熱式タバコの普及が若年層を中心に急速に進み、健康影響が少ないと誤認されやすいことから、従来の紙タバコとは異なる健康教育上の課題が生じている。本学では、1年次生の喫煙率は0.2%であるものの、4年次生では15.8%に上昇しており、在学中に喫煙を開始する学生が相当数いる(4年次生の喫煙者数は推定 800 名)。喫煙は睡眠衛生の悪化や欠席増加など学習への悪影響が指摘されており、加熱式タバコの普及を踏まえると、学生の健康・学習行動や認識を把握し、教育内容の再構築が急務である。 本取組は学生参画型で実施する。学内調査を対象に健康教育に関する基礎データを収集し、喫煙予防や禁煙支援に活用できる教材作成の基盤を整備する。SDGs 目標 3-a に資する取り組みである。

7 文化学の学びを可視化するものづくり教育プログラム	
申請代表者	須永 恵美子（文化学部／准教授）
共同申請者	桑原 夏子（文化学部／准教授） 成田 智恵子（文化学部／准教授） マレス エマニュエル ベルナル（文化学部／准教授） 高橋 早紀子（文化学部／准教授）
取組概要	<p>本プロジェクトは、文化学部の学びを見える化し、学生が手に取れる形で提示するため、文化学とものづくりを組み合わせた教育実践を行う。授業1回で完結する制作活動を軸に、各ゼミの専門領域に応じて、庭園の模型、螺鈿のキーチャーム、美術品の意匠をつかったTシャツ、ネイルチップなど多様な成果物を制作する。作品は学生が実際に身につけたり日常で使えるものとし、文化対象への理解を身体的・視覚的に深めることをねらいとする。</p> <p>また、制作過程を写真で撮影し、学修のプロセス自体を記録する。完成した作品と記録は、学内展示、オープンキャンパス、学内報告会で公開し、文化学部の教育の魅力を広く発信する。教員間の連携を促し、学生の主体的な学びと文化の楽しさを共有する学科横断型の試みである。</p>

8 初年次 DH 教育手法の開発に向けた共同研究	
申請代表者	須永 恵美子（文化学部／准教授）
共同申請者	近藤 剛（文化学部／教授） 加野 まきみ（文化学部／教授） 前田 尚武（文化学部／教授） 田中 里奈（文化学部／准教授） ファン ジェリーユンテ（文化学部／准教授） 成田 智恵子（文化学部／准教授） ペレッキア ディエゴ（文化学部／准教授） 熊野 貴文（文化学部／准教授）
取組概要	<p>文化学部では、令和8年度の改組に伴い、新カリキュラムの核となる新入生の必修科目「デジタルヒューマニティーズ概論」を新規開講する。本科目は3学科（文化構想学科、京都文化学科、文化観光学科）の教員が専門分野を横断して担当するリレー形式の授業である。本活動の目的は、単なるオムニバス形式の授業運営に留まらず、担当教員全員が参画する「共同研究」として教育実践を体系化することにある。具体的には、事前・事後のルーブリック評価とアンケートによる学修到達度・意識の可視化、および8月・12月の振り返りワーキングによる継続的改善を実施する。この活動を通じて、人文学とデジタル技術の融合教育における、再現性の高い標準的な教育モデルを確立することを目指す。</p>

9 AI アニメーションと 3D 可視化による文化発信の実践的教育	
申請代表者	須永 恵美子（文化学部／准教授）
共同申請者	大槻 佐保子（学外：京都情報大学院大学／准教授）
取組概要	<p>本プロジェクトは、文化学部におけるデジタルヒューマニティーズ教育の本格展開を背景として、AI 技術と可視化ツールを活用した教育モデルを構築する試みである。情報工学を専門としない学生でも直感的に扱えるAIソフト「Power Director 365」と、VRゴーグルを用いたアーカイブ可視化ツールを導入する。「デジタル表現実習 B」では、実写映像を AI アニメ化することで、匿名性を保ちつつ魅力的な京都紹介動画を制作し、学外プロジェクトへ投稿する。「デジタルアーカイブ実習」では、VR ゴーグルで体験できる「バーチャル・ミュージアム」の実習を導入する。代表者（須永）と共同申請者（大槻）が密接に連携し、異なる実習科目において AI・DX を共通軸とした教育手法を体系化・評価する共同研究として実施する。</p>

10 生成 AI 時代の教材・コンテンツ制作活動活性化プログラム	
申請代表者	今井 悠翔（情報センター／専任事務職員）
共同申請者	伊藤 慎一郎（アントレプレナーシップ学環／准教授） 平野 伸明（情報センター／課長） 青谷 実香（情報センター／特定専門員）
取組概要	<p>本活動では、教材・コンテンツ制作室を拠点として、生成 AI やデジタルコンテンツ制作技術を活用した実践的ワークショップを教員・学生向けに段階的に実施する。画像生成 AI や 3DCG モデリング等の活用方法を共有するとともに、教材制作や学修成果物の試作を通じて具体的な活用事例を創出する。また、アントレプレナーシップ学環やファブスペースと連携し、デジタルコンテンツを物理的成果物へ展開する取り組みの実施を検討する。</p> <p>活動成果はアンケート等により評価・整理し、テンプレートや事例集として学内に還元することで、学部横断的に活用可能な実践モデルの構築を目指す。</p>

11 SDGs 市民参加型ソーシャルアントレプレナーシッププログラム	
申請代表者	伊藤 慎一郎（アントレプレナーシップ学環／准教授）
共同申請者	なし
取組概要	<p>SDGs に資する市民参加共創型ワークショップの実施と成果アーカイブの構築を通じて、ソーシャルアントレプレナーシップを育成する教育プログラムの構築を目指す。本プログラムは、国連開発計画とアムステルダム応用科学大学のイニシアチブに基づき、申請者が 2016 年から日本において継続的に実施してきた市民参加型ワークショップ Global Goals Jam での実践を基盤としている。環境的循環性および社会的包摂性の観点を中核に据えた社会課題解決型学習を複数地域で体系的に展開し、学生と市民が共に参加する共創デザインプロセスを通じて、課題発見力、創造力、協働力、実行力の向上を図る。さらに、京産大発のソーシャルアントレプレナーシップに関する市民参加型プログラム事例として成果を整理し、市民が利活用可能なアーカイブを Web や冊子として構築・公開することで、教育的知見の蓄積と社会への還元、学内外への波及を目指す。</p>

12 本学初年次教育の質保証及び持続的向上を図る仕組み作りの検討	
申請代表者	松尾 智晶（共通教育推進機構／准教授）
共同申請者	久米 裕子（文化学部／教授） 足立 薫（現代社会学部／教授） 朴 艶紅（法学部／准教授） 西野 佳以（生命科学部／准教授）
取組概要	<p>初年次教育プログラムの質保証に関する各学部の取組の調査及び問題の焦点化について、2025 年度に一定の整理と共有、発信を達成した。しかしながら、課題の抽出調査が未実施の部署への対応、分析結果の所属横断の共有および学外発信の不十分さが課題として残された。さらに初年次教育で生成 AI をどのように使わせるかという、新たな課題も顕在化している。本取組では、初年次教育の課題と対策を全学横断で共有する仕組みの構築を目指し、調査継続及び生成 AI を用いた教育の質保証の取組を議論する場の構築と継続、前制度における分析・整理の結果である各プログラムの教育目標の共通点と差異点を洗練し、今後の全学的カリキュラム改善に資する。成果として、各部署が実践する初年次教育プログラムの内容と教授法の見直し、実践者の教育力の向上、さらには初年次教育の独自性と充実した取組を本学の教育力の魅力として学内外に発信することが可能となる。</p>

13	Editing and Practicing English Oral Presentations Using AI: A Task-Based Language Teaching Approach.
申請代表者	アヴェニド マヌエル ジュニア メルヤング (全学共通教育センター／実学英语講師)
共同申請者	なし
取組概要	<p>I have developed a task-based approach to teaching my students how to edit and rehearse their English OPs with the assistance of AI tools. I started this AI-supported learning initiative in the Fall semester last year, and initial findings have suggested positive results in terms of students' independent learning and responsible AI use.</p> <p>Therefore, I am proposing this classroom innovation titled "Editing and Rehearsing English Oral Presentations Using AI Tools: A Task-Based Language Teaching Approach," which I plan to carry out and implement on a larger scale beginning in the Fall semester 2026. Ultimately, it aims to integrate the benefits of AI into the post-writing stage of students' oral presentations. A set of instructions I have devised will guide students as they edit their English OPs in the first phase and rehearse their speeches in the second phase, following a human-machine-human, or more specifically, a student-AI-student workflow. This approach closely aligns with Licklider's (1960) concept of "Human-Computer Symbiosis," which posits that humans and computers operate in a closely integrated partnership, engaging in continuous feedback that mutually extends their capacities.</p> <p>In the first phase, students independently proofread and revise their presentation scripts. They then consult an AI tool to compare its corrections and suggestions with their own revisions. After that, they evaluate and reflect on the differences (metacognitive reflection) before producing their final revised version. In the second phase, students practice delivering their finalized scripts orally by recording themselves and metacognitively reflecting on their presentation skills, such as volume, pacing, gestures, and eye contact, using a self-assessment checklist. They then use AI, with appropriate prompts, to receive additional feedback on their volume, pacing, and pronunciation.</p> <p>This task-based approach to using AI tools for students' editing and rehearsal of English OPs aligns with Kyoto Sangyo University's guidelines, which emphasize that "students remain responsible for critically evaluating AI-generated content and verifying its accuracy using reliable sources." It offers a pedagogical framework for integrating AI into the EFL context while maintaining a balance between students' independent learning and their responsible, ethical academic use of contemporary technology, namely, AI.</p>